

水戸の金工

水戸の金工は江戸時代中期以降、特に幕末期に刀剣の外装金具彫金などで隆盛をみた。刀装具が中心で、^{つば}鑢、^{ふちがしら}縁頭、^{めぬき}目貫、^{こづか}小柄、^{こうがい}筭などに優れた作品が残されている。

鑢は柄と刀身との間に入れる金属板。縁頭は柄の先と根元につけて柄木を締める金具である。目貫は握りをよくするために柄の両側につける小さな金具で、装飾も兼ねている。

小柄は刀の鞘の外側に差し添える小刀、筭は本来は髪を整える道具が鞘の装飾金具となったものである。これら刀装具の小さな金属に様々な精緻な絵柄を彫刻し、それぞれ単体でも美術品として鑑賞できるものにするのが金工たちの仕事であった。

水戸金工の本格的な製作が始められたのは、水戸藩二代藩主・徳川光圀が殖産策のひとつとして奨励したためと言われる。江戸時代も光圀の頃になると、戦乱の時代が遠い昔となり、武士の魂と言われた刀は刀身そのものより外側の美が重視されるようになった。この傾向は旅に出るときに脇差だけ差すことが許された商人や農民にもみられ、特に裕福な商人などは経済力にものをいわせ、一流名匠の粋を凝らした刀装具で贅を尽くしたと言う。

水戸金工は、寛文・延宝年間（1661～1681）に軍地与五郎が江戸で修業して帰郷し、その後与五郎の門から谷田部通寿が出て、数多くの門人を養成し水戸金工の技術の向上と普及に努めたため、与五郎は水戸彫りの祖と称されているという。水戸彫りが特に有名になったのは、江戸時代後期から幕末にかけての時期であり、ことに水戸藩九代藩主・斉昭が奨励したことによって隆盛を極め、数多くの名工が輩出した。また水戸が大需要地の江戸に比較的近いことも幸いしたようだ。藩内で使用する鑢などは主に鉄製のものだったが、他に売り出すものは金、銀、赤銅、真鍮などを使用した豪華なものであった。

江戸中期以降、水戸には金工の流派がいくつもでき、それぞれが多くの門人を抱え、互いに競い合っていた。これらの金工従事者は、主に下町の白銀町を中心に住み、多い時には四百人にも達し、武士の二男、三男も多くいた。水戸家において彫金を奨励した当初は、できた作品は江戸麹町の三谷三九郎の店で扱う以外は大体、水戸侯から將軍家や諸大名への贈呈品として用いたり、藩士が他家への士分の者への贈り物としていた。文化年間に水戸の八百屋彌七が江戸へ商品を仕入れに行くついでに水戸彫りを持って行って、ひともうけしようとした。江戸の店は初めどこも受け付けなかったが、根気よく持ちまわっているうちに芝の道具屋の鍵屋太兵衛が水戸彫りの良さに目をつけ、一手に引き受けて売り出し始めた。それから江戸中に知られ好評を博すようになり、在府の諸侯や家士たちが参勤交代で帰藩の折、江戸土産として喜んで買い求めたため、水戸彫りは全国に広まった。

水戸金工の従事者の多くは士分の扱いをうけていた。といっても身分的には低かったようで、歴代藩主が奨励したことは確かだが、彼らが身分上特に優遇・保障されていたわけ

ではない。禄を貰ったとしても極めて微禄で、したがって金工一人ひとりについての資料と言えるものが少なく、はっきりとしたことは解っていない。そんな中で、水戸市の偕楽園内に建つ「二名匠碑」は、幕末期に活躍した二人の名工海野美盛（初代）と萩谷勝平とともに水戸金工の貴重な資料となっている。この碑は明治四十三年に建てられたもので、水戸中学（現在の水戸一高）の校長を務め水戸学の研究者としても名高い菊池謙二郎が撰文し、裏面の建設人名には当時、水戸金工の伝統を守る彫金家として活躍中の海野勝珉、二代海野美盛がそれぞれ皇室技芸員（現在の芸術院会員）、東京美術学校（現在の東京藝術大学）教授の肩書で名を連ねている。海野勝珉は初代海野美盛と萩谷勝平の双方から学んでおり、二代海野美盛は勝珉の甥にあたる。高さ二・四尺、幅一・二尺のこの碑には、勝珉自らの手による竜と獅子の浮き彫りが施され、次のような碑文が刻まれている。

世に水戸彫りと称される水府彫金（水戸金工）は、義公（光圀）の治世を踏襲した烈公（斉昭）の時代により隆盛をみ、海野美盛と萩谷勝平という二人の名匠を出した。美盛は通称太三郎、号を起龍軒といい、勝平は通称彌介、号は生涼軒で、寺門家から出て萩谷家へ養子に入った。美盛は玉川美久を師とし、勝平は実家の兄の寺門勝房に学んだが、いずれも元は谷田部通寿から出た流派である。

二人とも人となりは温良淳厚にして麴蘖（酒）を愛し風雅を尊ぶことは同じだが、その技術は趣を異にしている。勝平は専ら古法を守り、美盛は必ずしも古法にこだわらない。勝平は気韻生動、美盛は綿密精緻なところがそれぞれ勝っている。また、勝平は意匠凝らすこと限りなく、美盛は技巧に窮まりがない。しかし、二人とも精妙入神ということでは優劣がつけられない。

美盛は勝平より五歳年少だったが、文久二年（1862）に没した。生前、烈公の軍装姿を像にしたことがある。その作品はまるで烈公が生きているかのような見事なもので、さらに細部まで工夫が凝らされ、像が背負っている矢を一本抜くと、鎧かぶとがたちまち脱げるようになっており、時の名工たちもみな脱帽したといわれる。勝平が没したのは明治十九年（1886）で、美盛より二十四年遅く、明治の安定した世の中になってからである。彼は皇室の命を受けて、また外国人の求めに応じて、多くの優れた作品を作っている。花瓶、高炉、鏝などの彼の作品は国内外で宝とされている。

水戸金工が最も栄えたのは幕末期といわれる。しかし、この時期は尊皇攘夷、開国、そして倒幕へと、世の中が大きく動いた時期で、特に水戸藩においては天狗と諸生の二勢力が血で血を洗う内訌戦を繰り広げており、金工どころではなかったはずである。が、そんな時期でも幕府や有力大名、富裕な武士や町人からの需要は依然あったようで、多くの名品がこの時期に製作されている。

江戸時代には刀の拵え中心の製作だが、水戸の武士の間で使われたのは非常に粗末な鉄物であった。中身は良くても外装は大したことがないというのが水戸の武士の持ち物で、

身分の高い人でも意外に粗末な拵えであった。一方、藩外には赤銅…銅に金をはじめ色々な金属を混ぜたものであるが、その赤銅地に精巧な細工をしたものが出ている。

本当にいいものは有力大名のもとに納まっており、今も市場にあまり出てきていない。一般の収集家の手に入るのは、太平洋戦争後に没落した大名の子孫たちが手放したものである。そして水戸金工は細かく緻密なところが外国人にこのまれ、幕末に開港となってから外国へ行ったものも多い。特に図柄の派手なものは数多く外国人の手に渡っている。水戸藩は長州藩と並んで金工従事者が多く、作品も数多く今に伝わっているから、愛好家の間では全国的に知られている。緻密で写實的、そして丁寧仕上げている、というのが水戸金工の特徴である。だから、彫に多少硬さがある。それと、水戸気風の無骨さも感じさせる。図柄としては龍が多いが、これは光圀時代に招かれた中国・明の亡命学者・朱舜水の龍に対する信仰が影響している。

幕末もぎりぎりのところになると、藩内の混乱は極限に達し、さすがに金工どころではなくなる。そして幕府が倒壊して明治維新。武士の世ではなくなり、武士の刀の装飾を中心に仕事をしていた金工たちは大打撃を受ける。そんな中で苦難に耐えて水戸金工の伝統を守り、やがて置物など新時代に受け入れられる美術・工芸品としての金工の華を見事に咲かせた人達がいた。その代表と言えるのが海野勝珉である。勝珉は初代海野美盛の甥にあたり、弘化元年（1844）に水戸の下町（下市）肴町に生まれた。最初は美盛に学び、後に萩谷勝平に学んで、明治元年（1868）に上京、金工を業とする。

明治十年に開かれた産業振興を目的とした第一回内国勸業博覧会に、勝珉は高度な技術を駆使した作品を発表するなどして次第に名声を高め、明治二十二年には明治天皇の御前で彫金の妙技を披露した。翌年、第三回内国勸業博覧会に「蘭陵王舞楽置物」を出品し妙技一等賞を受賞、宮内省買い上げとなる。この年、東京美術学校（東京藝大の前身）に職を得て、一方で江戸金工の流れを汲む加納夏雄に入門、さらに研鑽を積んだ。

明治二十七年、東京美術学校教授となり、二十九年には当時の美術家の最高の榮譽職といえる帝室技芸員に任ぜられた。

勝珉は色の異なる金属を象嵌して華麗な味を出す作品が特長で、水戸彫りの伝統に、加納夏雄のもとで修得した片切彫という技法を用い、明治期らしい豪放さを加えた作風、といわれたが、大正四年（1915）に死去した。

このほか、二代海野美盛も東京にあって活躍し、勝珉に続いて東京美術学校教授となっている。その長男の健夫も金工家で東京藝大教授を務め、日本芸術院賞も受賞した。また、日本橋の三越デパートの正面入り口に大きなライオン像があるが、この作者は二代美盛の門人で、帝展審査員なども務めた那珂湊市平磯出身の磯崎美亜である。

明治時代になっても水戸に残って製作に励んだ名工もいた。明治十九年（1886）に没した萩谷勝平は、刀装具から一般工芸品の制作に切り替えて新時代の要請にこたえた。さらに、水戸において水戸金工の伝統を守りながら一般工芸品の制作に新境地を開き、水戸金

工の名を国内外に広めた人物に、初代北川北仙がいる。北仙は弘化三年（1846）に水戸下町の曲尺手町に生まれ、五代赤城軒元孚に入門し、明治維新後も水戸にとどまった。専心刻苦の後、明治二十三年（1890）には銀製獅子香炉、蟹流文花瓶を制作して皇室御用にこたえるまでになる。さらに明治二十六年、アメリカのシカゴで開かれた万国博覧会に、銀製チャボー対置物と金銅児童騎亀像を出品して金牌を受け、水戸金工の名を世界的なものとした。

初代北仙は水戸徳川家の依頼により、師の五代赤城軒元孚と合作で「兵庫鎖太刀拵」を制作した。これは皇室に献上され、現在は東京国立博物館を経て水府明德会（徳川博物館）が保管するところとなっている。初代北仙はその後、単独で同種の拵えをつくり、水戸出身の横綱・常陸山が明治四十年（1907）に渡米した折持たせている。この作品は常陸山から時のアメリカ大統領セオドア・ルーズベルトに献上された。

（常陽藝文 1990 年 8 月号より）

このように水戸の金工は緻密で写実的で、極めて工芸品的価値の高い物が数多くあります。良い物になると、見る者の心を引き付けて放さないものが水戸金工の作品にはあるのです。しかし、その作品が現在、見る機会がほとんどないことが残念に思っておりました

このたび株式会社祐月本麿では、二代目和田祐之介が収集した刀鐔を公開し、水戸藩の産業を広く伝えてゆきたいと願い和田祐之介資料館を開館いたしました。

江戸時代の水戸金工を鑑賞していただければ幸いです。

2015 年（平成 27 年） 2 月吉日